

農村の心

「比婆荒神神楽」

〜地域が紡ぎ続ける伝統芸能〜



比婆荒神神楽を紐解く

中世からの記録を残す伝統芸能

比婆荒神神楽は、西城・東城の
一帯で継承されてきた民俗芸能。
その中でも発祥地といわれる東城
町竹森・田森地区が中心となり、
この伝統文化を大切に継承してき
た。出雲流採物神楽の一種といわ
れ、神がかりの神事（※1）、荒
神信仰の芸能要素を含んだ神楽で
ある。式年と呼ばれる年に、古く
は四日四晩（現在は二日一晚）に
わたって、比婆荒神神楽社と神職
と共同で奉納されてきた。

この神楽の本舞である能舞は、
「岩戸開」「大社」などのほか、こ
の地独特の「吉備津彦」「大仙能」
など合わせて十数曲を持つ。また
最終日夜の灰神楽（へつつい遊
び）では、「水草の舞」に続いて
「土公祭文」「宝廻し」「内輪納め」
「餅取り」「恵比須の船遊び」の五
段が演じられる。特に灰神楽など
の特殊次第を持つ点が、芸能史的
にも貴重とされている。
比婆荒神神楽の記録は、朽木家
（東城町戸宇）に伝えられる江戸

古から脈々と継承されてきた「神楽」。
日本古来の伝統文化であり、全国にはいくつもの神楽がさ
まざまな形で継承され、存在しています。
なぜ、人は神楽を舞い続けてきたのか。
それは、無形民俗文化財として県内で唯一国の指定を受け
た神楽、「比婆荒神神楽」の継承とそれにかかわる人々の営
みを知ることで見えてきます。



写真提供：東城写遊会 近藤芳弘さん

時代の文書に記されており、荒神
の祭りとして神楽が舞われていた
こと、病に侵された人を治療する
祈禱が神楽と結びついていたこと
も、文献からうかがうことができ
る。こうした記録が残っているこ
ともその価値を高めている。昭和
54年2月3日に国の無形民俗文化
財に指定され、以降、比婆荒神神
楽保存会（※2）によって守られ
てきている。

※1 神がかり神事を伝えるの
は、比婆荒神神楽と同時期に指定
された備中神楽（岡山県高梁市）
と大元神楽（島根県江津市）も共
通している。

※2 比婆荒神神楽保存会
比婆荒神神楽の保存母体。比婆
荒神神楽社、神職部会、学識経験
者などで構成。比婆荒神神楽社は
比婆荒神神楽の舞手組織。

市内には比婆荒神神楽のほか、神官が舞う神
楽として、「比婆斎庭神楽（比和町・高野町）」
「三上神楽（庄原地区一円）」がある。いずれ
も県の無形民俗文化財に指定されている。



比婆斎庭神楽



三上神楽

比婆荒神神楽のあらまし

湯立て神事



当屋の庭に湯釜を据え、神職が当屋の建
物を背にして座り、湯立て歌を歌いなが
ら湯釜で当屋内外を清める。

荒神迎え



神職と氏子が名内（みょうない）の本山
三宝荒神社に向き、ご神体を白木箱で
包み宮司が抱きかかえて当屋に向かう。

七座神事・打立



太鼓・笛・手打鉦を用い、楽合わせをす
る

古い形式を残す芸能神楽

昨今の神楽ブームもあり、神楽イベントを目にすることも多い。地域起こしで神楽をしている地域も増えている。日本神話に由来する物語と、そのきらびやかな衣装、華麗な舞いは多くの人に受け入れられている。しかしながら、神楽はもともと観客相手に舞うものではなく、神に対して奉納する神事として厳粛に行われていたという。

そうしたなか現代神楽は、神に対して舞う『神事』、神と人の両方に対して舞う『芸能』、人に対して舞う『演劇』、と大きく分けて3つに分類されるといわれ、比婆荒神神楽は、古い神楽のかたち、神がかりの神事を伝える鎮魂の要素を色濃く残しているのが大きな特徴で、『芸能』に分類される神楽である。西城・東城の一带に伝わっている比婆荒神神楽でも、特に東城町竹森・田森地区にこうした形式が残っている。

比婆荒神神楽保存会会長の横山邦和さんは「神楽とは神前で奏する舞楽であり、神様を崇めるといふことが本来の姿。比婆荒神神楽は神に対する信仰とともに、地域の共同体のひとつとして結びつきをつくる行事でもある。見栄えのいい派手な神楽とはそこに違いがある」と継承者としての自負をのぞかせる。

神がかりの神事が特徴の神楽



中島 好昭さん
なかしま よしあき
ぬか 神社宮司

比婆荒神神楽の特徴は、何と言っても神がかり行事が残っている点です。芸能としての神楽は、神と人間の両方を相手に行う神楽と言われ、比婆荒神神楽もこれに当たります。現在は比婆荒神神楽社と私たち神職と一緒に舞を行っています。

特徴的な灰神楽の中の「内輪納め」は、もともとは嫁と姑のけんかを面白おかしく演じるもので、「嫁が遅くまで寝て仕事をしない」「姑はご飯を食べさせてくれない」といったやり取りを漫才のように演じ、この2人を仲裁するというものでした。大神楽が終わってから行われる神楽で、打ち上げや残念会という意味合いがあります。そこにも神がいて、「笑い」を捧げて一緒にかけあいを楽しむのです。

比婆荒神神楽は、餓死神楽と豊年芝居と言っていました。これは、飢饉など何かしら災いがあった特別な年に神のたたりを恐れて、神楽を舞っていたといえます。式年神楽は、13年、33年など節目の年に行われていますが、小集落の「名」として行われる神楽が同年に行われるのはそういったことが関連しているとも思われます。

そうしたこともあり奴可神社では、宮を建てたのを機に、地区の各名の荒神を一同に集め、その年から毎年神楽を行っています。

受け継がれる「名」と式年神楽

名の守り神「荒神」

東城・西城地域には、数戸から十数戸を一つの範囲でくくった中世から伝わる「名」という形が残る。

名とは、中世の国衙領や荘園で徴税のために設けられた単位といわれており、この地域では一つの小集落を指す。古い時代の営農集団のようなもので、同じ水路を使い、税金も共同で納め、お互い助け合って生計を営んでいる「生活共同体」という表現もされる。それぞれの名に荒神が存在し、昔は1つの名で1つの神楽が舞われていたが、現在は氏子の減少により複数の名が一緒になって神楽を行っている。

この名の信仰の中心に本山三宝荒神が存在する。名全体の祖霊神・守護神に対する信仰神楽として比婆荒神神楽が行われている。毎年奉納する小神楽と、最も盛大に厳粛に行われる式年大神楽がある。式年大神楽は、前の式年から数えて7年、9年、13年、33年目に行

われ、何年目に行われるかは、それぞれの名の習慣で古くから決められている。

神楽は、準備やそれにかかわる人手を考えると30戸以上ないとできない。大神楽に至っては、小神楽の3倍もの経費と労力がかかるといわれ、人々と神楽の結び付きの強さを感じる。

式年神楽は、古くは荒神社付近の田畑に神楽を舞うためだけの神殿を新築して行っていたが、近年は名内の民家で行われている。これを当屋と呼び、大当屋と小当屋が設けられる。小当屋では神楽の準備、荒神迎えや七座神事など、土公神遊びまでが行われ、その後大当屋に移動（神殿移り）し、それ以降の舞は大当屋で執り行われる。

神楽には住民を

一つにする力があつた

その昔、人々は生活にかかわる多くの作業を共同で行ってきた。日々付き合ひがあることから、け

んかになることもよくあつた。それでも小さい集落で人間関係が保たれてきた背景には、神楽の存在が大きいという。「神楽と一緒にいうことになれば、日頃のわだかまりも、仲直りのきっかけにもなった。集落の維持に神楽が大きいかかわっていた」と中島さんは振り返る。

地元を離れていても、神楽があると聞けばそのためだけに帰り、みんなで声を掛け合う。名内のほとんどの家の家族全員が当屋へ集まる。これを機会に住民同士がつながり合い、結束力が強くなったという。

中には「式年神楽は地域の法事みたいなもの。これをしていないと気持ち悪い」という人もいる。皆で祭事をつくり上げていくことよって、地域が一つになりまるとまる。こうした比婆荒神神楽は地域になくてはならない唯一無二の存在として、その伝統が息づいているのである。

写真提供：東城写遊会 近藤芳弘さん



神職が行う神事舞で非常に荘厳な舞

神迎え



案人(あど)が猿田彦の神徳を述べて舞った後、猿田彦が扇と太刀を持って悪魔祓いの舞を行う

猿田彦舞



鈴・扇・ござを持って舞、最後にござ跳びをして座を清める

莫座舞



榊と鈴を持ち、神座と参集者を清める舞

榊舞



当日の舞い手の役割を指定した紙を竹串に挟んで舞う神事舞

指紙



扇と幣を持ち、神楽の基本舞

曲舞

継承への課題

神楽を行うまでには、祭壇を組み、宮の清掃や参道の草刈り、供え物の準備、しめ縄の作成、当屋の神棚飾りなど、さまざまな準備を行う。当日には神職や舞手など関係者全員の食事をこしらえる。これらは全て当屋が行っていたが、現在は当屋となる家族人数が少なくなっていることから、名内の各家が協力して行っている。

東城町竹森地区には16名57戸ある。その中の一つ、岡田名は一昨

年の式年大神楽に続いて今年12月、33年ぶりに御戸開き神楽（※）を行う。岡田名式年大神楽実行委員会委員長の大西清さんは「隣近所のつながりがあって神楽ができてきた。昔は神楽があるときは、遠くに出ていても帰ってきていたが、今は帰らせないと人手が足りなくなっている。家の裏方として台所のことや片付けや準備で人手が必要で、高齢者ばかりの家だとそれは難しい」と現状を明かす。

また、神楽を舞うには、ふすまや障子で仕切られている田の字型

の家でなければ難しく、近年は壁で仕切られている家が多くなり、神楽が舞えるような空間がある家が少なくなっているため、昔のような神楽殿を求める声も出始めている。

ほとんどの名でこうした課題を抱えながら、継承への道を探り続けている。

※御戸開き神楽：式年大神楽を行ったあと3年目に行う神楽。式年大神楽から御戸開きまでの間、荒神は扉の奥に姿を隠していて、その扉を開けて再び迎えるための神楽。

誇りうる文化を次世代に残す それが継承した私たちの責任



岡田名式年大神楽 実行委員会委員長 大西 清 さん

昔、神楽は民衆にとって唯一と言っていいほどの娯楽でした。神楽をすれば地域の人みんな当屋に集まり、子どももお年寄りも、その家のどこに何があるというのが分かっていて、菓子がある場所には子どもが群がる光景がありました。そうやって地域に育ててもらい、荒神に対する思いや先祖を敬うことも自然と身に付いていました。

近代になりテレビなどが普及し始めたことで、神楽への興味が薄れ、神楽をすることが減りました。そうした影響からか、今ではそういう心の部分が薄れてきていると感じています。

神楽を行うことは生きていくうえでの希望であり、誇りうる文化です。その自覚を持つ人がいなくなれば、この先神楽も地域も残っていきません。この地域で息づいてきた「先祖を敬う心」「感謝の心」を、次の世代に伝えていくことが私たちの責任だと思っています。それが神楽であり、集落を守っていくことにつながると思っています。

次世代につなぐために

伝統芸能継承の難しさ

名の維持と同様に、比婆荒神神楽を舞う人がいなければ継承はままならない。

正統な比婆荒神神楽を舞うことのできる比婆荒神神楽社が、名で行われる全ての祭りに呼ばれ、神楽を舞う。メンバーは、太鼓、笛、鉦、舞などの役を入れ替わりながら全てこなしている。年を追うごとにメンバーも入れ替わっていくが、現在は8人。竹森地区の人だけで続けてきたものの、近年は難しくなったため、今は神石高原町や岡山県新見市などからも人を受け入れ、その舞を教えながら運営を続けている。

しかし、人前で舞うには10年はかかるといわれる比婆荒神神楽。

「神楽は観ると簡単にできそうに思えるが、実際にやってみると難しい。昔から身近に神楽があれば違うが、荒神祭りという雰囲気を知らない者であれば、習得には相当の時間がかかる」。横山さんは継承の難しさを口にする。

メンバーの入れ替わりは、それまで培った技術・ノウハウの継承が途切れてしまう懸念がある。「比婆荒神神楽は単に神楽を舞うだけでは駄目。舞うこともできなければいけないが、実は太鼓が大事。太鼓には楽譜がなく、五感を使い体で覚えるほかない。これを一緒にできるのは神楽社の中でもごくわずか。そして、神事を覚えなければ人前には出せない」。それが文化財として継承していくことの難しさでもある。

覚えることが多く継承の難しい神楽 だからこそ継承に携わっていることに 大きな誇りを感じている



比婆荒神神楽保存会 会長
よこやま くにかず
横山 邦和 さん

写真提供：東城写真会 近藤芳弘さん



大当屋の囲炉裏を中心にして演出する。

灰神楽（竈遊び）



竜押し後、当屋に運び神前の舞台の対角線上の柱に腰高にくくり付けた後、「神がかり神事」を行う。その後、荒神を元の社に送り、竜を社の近くに巻きつける。

舞納め・荒神送り



大当屋の近くの神殿田に向かって威勢よく竜を担いで行き、竜を押し合う。

竜押し



八重垣の能



神話に基づいて創られた物語風な舞。岩戸の能・国譲りの能・八重垣の能がある

能舞



各戸の土公神の降臨を仰ぎ、それぞれの吉凶禍福を占い、その家の当主に告げる神事

土公神遊び



竹森地区で一昨年に行われた式年大神楽での竜押しの様子

写真提供：東城写遊会 近藤芳弘さん

ともしり始めた継承への光

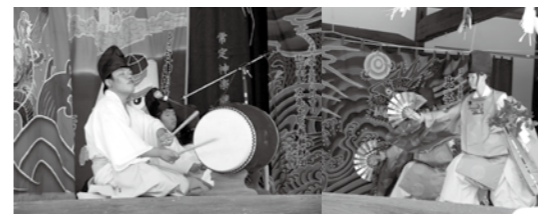
子ども神楽塾

「郷土の誇り比婆荒神神楽を継承し続けたい」。田森地区では、比婆荒神神楽継承への危機感から、継承を目的に「比婆荒神神楽田森後援会（現、比婆荒神神楽東城後援会）」を設立。そこが母体となり平成13年、比婆荒神神楽子ども神楽塾を発足させた。

当初、子どもがなかなか集らなかつたが、地道な活動で少しずつ塾生を確保。神楽をやりたいとい



左) 毎年実施される夏合宿の様子。異学年が一緒に学び合い、連帯感を深めている。
下) 太鼓奏者林英哲さんも絶賛する太鼓に合わせ、神楽を舞う神楽塾のメンバー。



う子どもが増え、現在は小学生を中心に15人が神楽を学んでいる。田森自治振興センターを会場に毎月2回（第2・4土曜夜7時から2時間）、比婆荒神神楽社の指導を受けながら、伝統芸能の習得に汗を流している。

指導にも携わっている横山さんは「神楽は舞えるというだけではいけない。笛を吹き、鉦を鳴らし、太鼓もたたく。そこで神楽の心が育まれる。歩き方や姿勢、あいさつなどの礼儀がきちんとできること。それが全て舞台に出る。そうでなければ観る人には伝わらない」と語る。舞よりも心に重きを置いた指導を行っている。

大舞台で大きく成長

そうした熱心な指導もあり昨年8月、第14回全国こども民俗芸能大会に中四国ブロックの代表として選ばれ、初の大舞台を踏んだ。その演舞は高い評価を受け、子どもたちも自信を深めた。この成功体験から子どもたちの神楽に対す

る姿勢が変わり、より練習に打ち込むようになったという。「今は上級生が率先して下級生に教えてくれる。6年生がリーダーシップをとってくれているので、私たちが何も言わなくてもできるようになってきている」。横山さんはこれまでも言い続けてきたことが、子どもたちに伝わっていることに喜びを感じている。

「大きなステージになるほど注目されるし、緊張するのは当たり前。だからこそいい舞台を務め上げることができる。それには練習の積み重ねしかなく、誰にも頼ることはできない。その恐怖心に打ち勝つこと、それは人生そのものだと思う。子どもたちには自分自

身で目標を決めて、自分で努力して進んでほしい」。比婆荒神神楽の継承は、子どもたちに託される。



interview

猿田彦舞を頑張る！



いわた ともや 知弥くん
(東城小6年)

保育所の年中のときから神楽を学んでいます。厳しく叱られるときもありますが、神楽を舞うのはすごく楽しいです。今年から猿田彦の舞をすることになり、もっと神楽が楽しくなりました。早くマスターできるように頑張りたいです。将来は東城に残り、神楽を続けていきたいです。

子どもの成長を感じています



いわた しょうこ 尚子さん
(東城町川東)

神楽を見た子どもが、僕もやりたいと言い始めたことがきっかけで、こども神楽塾に通わせ始めました。練習では神楽の基本を学ぶと同時に、あいさつの仕方や生活態度なども学ばせてもらっています。厳しく指導いただいているが、一度もやめたいと言ったことがありません。昨年、東京の公演など大きな舞台を踏ませていただいたことで、大きく成長していると感じています。子どもにとって神楽は大きな財産になっています。

神楽を舞う

中世から受け継いできた伝統は

現代に生きる私たちが失いつつある農村の心

それは私たちが住んでいる地域の祭りにも通じている

何気なく参加している地元の祭りを懐古してみるのはどうだろう

名の人々が受け継いできた姿を

自分たちの地域に重ね合わせてみたとき

そこにきつと懐かしさを感じるはず

残したい 後世に伝えたい

比婆荒神神楽はその心とともにこれからも継承されていく

